

## 研究滞在記

分子集合解析領域 博士後期課程 1 年 凌榆凱

令和 8 年度若手研究者国際短期派遣事業の支援を賜り、約三ヶ月にわたり、ドイツの Frankfurt am Main(以下 Frankfurt と略す。)市近郊にある Goethe Universität Frankfurt にて、Matthias Wagner 教授の研究室に滞在した。Frankfurt はヨーロッパの金融中心地として発展し、多様な文化が共存する国際色豊かな都市である。一方、大学の化学研究所は緑豊かな環境に位置しており、研究に集中できる落ち着いた雰囲気が整っていた。

Wagner 教授の研究室では、DBA(DiBoronAnthracene)誘導体、特に N2B2S2-Heptacene の合成研究に取り組んだ。有機合成化学および構造有機化学の分野で最先端の研究を行う環境の中で、実験技術に関する知見を深めるとともに、分子設計と構造・物性相関に対する理解を大きく高めることができた。

日頃は研究内容だけではなく、日常生活やお互いの国の文化についてもさまざまな話をすることができた。午後のお茶休み(Teepause)の時間は仕事の効率を高めるための重要な時間だという考え方が特に印象的であった。また、筆者は語学力を深めたいと考え、滞在先では研究から日常雑談まで、最初から専らドイツ語を使用しており、3ヶ月間の鍛錬を経てほぼ不自由なくドイツ語で意見交換ができるようになった。現地語の語学力は、滞在中の日常生活および現地社会への理解には大いに役に立った。更に、研究室の W. Lerner 准教授は特に歴史や社会政治に詳しい方であり、欧州の歴史や社会情勢について日々議論する機会があり、多角的な視点から世界を捉える重要性を学ぶことができた。

研究以外では、研究室のメンバーとともにスポーツ活動に参加したり、大学の国際交流活動や言語交換会に参加したりし、充実した留学生生活を堪能した。Frankfurt の国際的環境を活かしてさまざまな国や文化背景を持つ人々と交流し、何回も一緒に隣国を日帰り訪問した。様々な異なる価値観に触れることで、自身の視野を広げる貴重な機会となった。

また、研究滞在を機に、欧州社会の良い面と悪い面を総合的にとらえることができ、改めて日本での生活および化研での研究のありがたさを実感させられた。まさに「百聞は一見に如かず」のとおりである。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった京都大学化学研究所および Wagner グループ関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

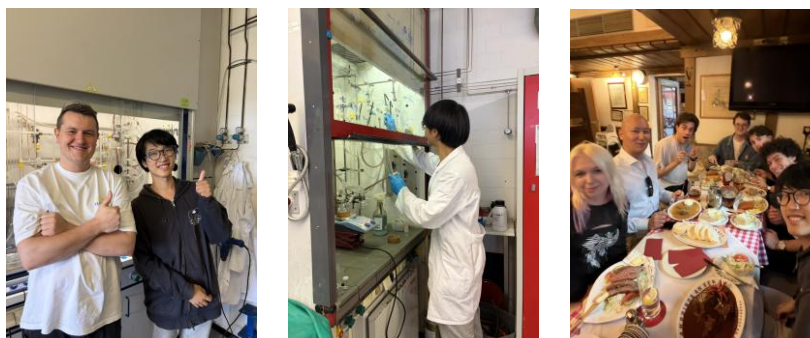


Figure 1. (左)筆者と親友 C. Zentgraf (博士課程学生); (中)実験中の様子; (右)国際交流活動後の晩餐会の様子(全員異なる国籍、交流言語はドイツ語)